

名作選集

剣人武芸篇 下巻

西澤道書舗

名作落語全集

〈第四巻〉

著者承認
検印省略

剣人武芸篇〈下巻〉

昭和43年11月15日 印刷
昭和42年11月25日 発行

¥300

編著者 今村信雄
発行者 西澤道夫
印刷者 松沢印刷KK

発行所

西澤道書舗

東京都千代田区神田神保町1-1-3

落丁・乱丁の際はお取替致します。

名作落語全集

剣人武芸篇 下巻

今村信雄 編著



西澤道書舗

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

④ 剣人武芸篇

もくじ

館 林	蝶花楼	馬 楽	7
深山隠れ	桂	春団治	24
おわか伊之助	桂	文 治	37
提灯屋角力	桂	文 楽	64
義経嶋越え	三遊亭	金 馬	84
蚊いくさ	蝶花楼	馬 楽	98
庖 丁	春風亭	柳 橋	119
た が や	橘 家	円 蔵	139
角兵衛の女房	三遊亭	小円朝	154
泳ぎの医者	柳 家	小せん	166

刀屋	三遊亭 小円朝	176
猪退治	三笑亭 可楽	185
魂違い	柳屋 小せん	198
宿屋の仇討ち	春風亭 柳橋	212
現代落語家名鑑へ上方落語協会▽		228

風流小話

。宴会の夕べ	22
。はげしすぎる	23
。モデル 。結婚調査	62
。もっと元気	63
。あぎれた 。本ものは	96

- 自分のことは自分で
- 誤植 ◦ たまご
- 職業調査
- 孝 行
- 何が安心
- え？ あっ、そう
- 山椒太夫
- ほうぎの柄



館^{たち}

林^{ばやし}

(蝶花楼 馬楽)

高慢^{こうまん}なことを申しあげるようでございますが、なんでも人間は、ときどきは旅行をして見ない所を見たり、景色のいい所を眺めて新しい空気を吸ったりするのが、まことに楽しみでもあり、第一からだの薬だそうでございます。けれども昔と当^{とう}今^{こん}とは大きにその旅行のいたしかたが變わつてまいりました。昔はずいぶん武芸^{ぶげい}をわきまえておりまして、夜旅^{よたび}をいたして、山賊^{さんぞく}追^お剥^{はぎ}などにてあい、それと戦つたりなにかすることがあつたそうで、お芝居^{しばい}でも毎度拝見いたしますが、武者修行^{むしゃしゆぎよう}とくると、たいがい女を助けてその女にほれられるというもうけものがある。そういうところから思いついて、おれも一つ武術^{ぶじゆつ}を習おうかなと、武芸流行^{ぶげいりやう}のおりからには商人^{あきんど}でも職人^{しやくにん}でも、セッセとやつたもので町道場^{まちどうじやう}をかまえて、いかめしい顔をして、門人^{もんじん}をとりたっている先生の所へお弟子^{でし}入りをいたして、昼間^{ひるま}一日仕事を^{ひるま}して、疲れているのに、夜になって、ご苦勞^{くろう}千^{せん}万^{ばん}にも、まるでせっかちがすすはきでもするか、竹河岸^{たけがし}で火事でも始まったように、ポンポンや^{ばん}つて。劍術^{けんじゆつ}というものは、道具^{どうぐ}のない所を打ったのでは、勝負にはならない。それゆえご承知^{しょうち}

のとおり、面めんというかめの子のあばらのようなものを顔にあてまして、頭へはぞうきんの親方おやだみたようなものをかぶり、手には正覚坊しょうかくぼうの手袋かと思うようなものをはめて、胴どの所へ竹で建仁寺を結い回したりなにかする。中には朱塗金紋しゅぬきんもんなどというのがある、まことにきれいでございますが、これが勝ったときはりっぱだけれども負けたときにはあまりはでやかのは目にたつて、かえってきりやうが悪うございます。それにまた稽古けいこを見ておりますと、打たれたほうで、おみごとなどとほめてるのもあれば、まだまだ、まだ、かすったかすったなどとうまく逃げてるのもある。これが竹刀木刀ちくとうぼくとうだから、かすったで平氣でいるが、真劍しんげんでかった日にはからだを半分なくしてしまいます。どこの道場どうじやうへまいりしても、一人で腕うでッ節を強がっていて、あまりできないのがあります。こういう輩やからは多く生兵法大怪我なまびやうほうおおがのもとというたとえのとおり、なまじなまなかそんなことを習ったためにけがをする御人ごじんが幾らもあるようで、というのは、自分が天狗てんぐになるから、つまりナニあのからいの奴やつなんかと侮あなどってかかるために大きなまちがいができる。もっともやる者は各々天狗おのおのてんぐでございます。

半「先生こんにちは」

先「ヤアこれはたれかと思つたら半はんさんかえ」

半「へエ、エーこんにちは先生に少々しょうしょう相談があつて参りました」

先「ハア、改^{あら}たまつて相談とは何だね」

半「イエほかでもありませんけれども、この劍術^{けんじゆつ}というものは、武者修行^{むしやしゆぎやう}をして、他流試合^{たいうちあい}をしなれば腕^{うで}があらぬということを知^しりますが、そうでございましょうか」

先「それは大きにもつともな話だ。ずいぶんわしなども昔は武者修業^{むしやしゆぎやう}をしてこわい思^{おも}ひをしたこともしばしばある」

半「へエなるほど、ついででございますな先生」

先「ハア」

半「私も一つ武者修行^{むしやしゆぎやう}に出ようと思いますが。私が武者修行^{むしやしゆぎやう}に出て、当^{とう}ご道場^{だうぢやう}におりませんようになりましたら、さだめし先生^{せんせい}が右の腕^{うで}をなくしたようにおぼしめししょうけれども、しかしじゆうぶん修行^{しゆぎやう}をして戻^{かへ}つて参^{まゐ}つた暁^{あかつき}には、また当^{とう}ご道場^{だうぢやう}において、先生^{せんせい}にきつとご恩返^{おんがえ}しをいたすつもりでございます」

先「イヤそれはそれはありがたいことだ。それではなにか、商売^{しょうばい}をやめて劍術^{けんじゆつ}使^{つか}いになろうというお考えか」

半「へエもちろん武芸者^{ぶげいしや}で世渡^{よわた}りをしたいと思^{おも}います」

先「イヤたいそうな望^{のぞ}みだな。しかし旅^りというものはなかなか艱難苦勞^{かんなんくろう}の多いものだ。わしが武^む

者修行しゃしゆぎやうをして歩いた時分じぶんにこういうことがあった」

半「へエー」

先「上州館林じやうしゅうたてばやしへ行った」

半「ハア先生せんせいが……。なるほど、上州館林じやうしゅうたてばやしで馬をぬすんだんですか」

先「ばかを言いなさい、ちょうど館林たてばやしの宿しゆくはずれまでまいって宿やどをとろうと思って、どこにしようかとだんだん歩いて来ると、そこに杉酒屋すぎざかやがあった」

半「なんでございますか、杉酒屋すぎざかやというは」

先「つまり当地とうちでいう居酒屋いざかやだな」

半「なるほど、そこで先生食たい逃げでもしたんですか」

先「ばかなことを言え、マアまぜッ返しをせずせに聞きなさい」

半「へエ、どうしたんで……」

先「おおぜい人がたかってワアワア騒さわいでいる」

半「なるほど」

先「ちやうどそれがひともしごろだ」

半「へエー」



先「なにか酔漢すいかしが喧嘩けんかでもしているのかと思って、おおぜいの人の後ろうしろへ立ってようすを聞くと、そうではない。宵よいだというのにその杉酒屋すぎざかやにどろぼうがはいった」

半「へエー、じゃアなんでございますな、くれがたのドサクサまぎれに、ぬすつとがはいりやア

がったんで……」

先「ウム、それが尋常じんじょうの盜賊とうぞくではない。長脇差ながわきざしの群むらかなにか、つまりおしこみだな」

半「へエーおおぜいはいったんですか」

先「イヤ聞くとところが大ぜいおおぜいではない、ただ一人ひとりだそうだ。店の者をおびやかして、土蔵どぞうの中へはいったので、中で心きいた者が土蔵の戸を外からしめてしまった」

半「なるほど、ぬすつとが蔵の中へぶちこまれちまったんですね」

先「さよう。サアこれを召し捕とろうというのだが、なかなか蔵くらの中へ飛とびこむ者はない。ただ外で、ワアワア騒いでいるばかり。中では刀を抜いて戸をあけたら切りおろそう

というので身構みかまえておるからどうすることもできない。見るに見かねたから、人を押おし別わけてわしの中へはいつて、召めし捕とつてやろうといった」

半「へエー、じゃアなんですか、先生が一人ひとりでそのぬすつとを召めし捕とろうとしたんですね」

先「そうだ」

半「うまくいきましたか」

先「サアそこがいわゆる武芸ぶげいのたしなみというものだ」

半「へエーじゃアなんですか、その蔵の中へやはり拔身ぬきみを持って飛びこんだんで……」

先「イヤそうではない」

半「どうしました」

半「その家の亭主ていしゅとだんだん話をして、まずわしがおちつきはらって、あったかいおまんまを持ってきさして大きい茶碗ちawanへ五杯はいとやった」

半「おそろしい大食おおくらいだね。なんだってまたその場合におまんまを食べたんで……」

先「腹がへっついてはじゅうぶんに働きができん」

半「なるほどねえ、やっぱりなんですかい、武芸ぶげいのたしなみってえやつで……」

先「いかにも」

半「それからどうしました」

先「それからまず味噌汁を二杯吸った」

半「おそれいりましたねどうも、おまんまを五ぜんに味噌汁を二杯」

先「それから後で独参湯を一ばい……」

半「たいへんに食うじゃありませんか、ばかばかしい」

先「そこが武芸者の心得だ。戦いなかばに腹のへるようなことがあつてはならんから……」

半「なるほどねえ、それからどうしました」

先「それからじゅうぶんに身支度におよんで、一刀を抜いたが考えた」

半「どう考えました」

先「ここですまず戦うにしても、むこうを殺してしまつてはなんにもならん。なるべくいけどりにしてくれようと思つて、主人を呼んで俵を二俵取りよせた」

半「へエ、空俵を……」

先「そうだ」

半「空俵なんかどうするんで」

先「そこだ。いわゆる当意即妙まずこのへんが武芸のたしなみだ」

半「俵を取りよせてたしなみというはおかしいが、どういうわけなんです」

先「黙だまって聞きなさい。それからいきなりその俵を蔵の中へポンとほうりこんだ」
半「なるほど」

先「スルと、むこうではモウちまよつてゐるから、あけてポンと飛びこんだから人間だと思つていきなり切りおろした。そこへわしが飛びこんで、こてをつかみ、肩へかついで巖がんせき石落とし、表の方へズデンドウとほうりだした」

半「へエー」

先「ただ一太刀たちも切りあわずに、召めし捕とつてしまった」

半「なるほど」

先「賊ぞくはすぐに役人やくにんの手へ引き渡してしまふ。その家うちでは大喜び、まことにありがとうぞんじますと言つて、まるで神のように扱つたが、わしもそのときには押おえに出では出でたが、じつは心中しんちゆうにこわい思いをしたよ」

半「へエーなるほど、そうでございましたらうね。しかしたいしたお腕うでまえですな」

先「それからそこにはしばらくの間足をとめて、土地の者に剣術を教えたりなにかしていたことがあつたが、旅をしている間にはずいぶんおもしろいこともこわいこともある。その苦勞くろうをしてこ

なければなかなか一人まえにはなれんものだ」

半「なるほど、どうもありがとうございます。じゃアなんでげすね。私もモウ少し稽古をつんだうえでなければ、武者修行には出られませんかね」

先「もちろんそうだ。モウ少々腕を磨いたうえでなければ、他流試合もできず、またいまのような場合にもなかなか賊をとりおさえることなどはできん。いい時分にはわしがゆるすから、そのうえ武者修行に出なさい」

半「ありがとうございます。じゃアまた晩に稽古に参ります」

先「マアマア武者修行のことは当分思いとまって、わしがゆるすまで、稽古に精だして来なさい」
半「へエまた来ます。さようなら……、アアモウじゅうぶんだと思ったが、まだたりねえところがあるとみえるな。モウ夕方だ。町内でどこかそんな騒ぎがあるといいな。ふんづかめえて、一つ先生を驚かしてやるが……」

とひとりごとを言いながらブラブラやって来るとちやうどくれたのこと、町内の居酒屋でまちがいができたものとみえ、表に人が黒山のようにたかっている。

半「なんだなんだなんだ」

○「ヤア半ちゃんか」